怪談

11月20日
Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

11月20日のおはなし「怪談」

「夜更かししたらあかんよ」
　毎晩のように、おばあちゃんに言われた。子どものころ。
　そのころ私はマンガを描くのが好きで、晩ご飯を食べ終わり風呂から上がるともう夢中でマンガを描いていた。他の子どもたちがテレビに夢中になっている時間、私はただひたすらマンガを描いていた。小学校3、4年生の頃は人物や動物を単体で描くだけだったが、5年生になってからはストーリーものに手をつけるようになった。こうなるともう誰にも止められない。

　誰かが何かを話しかけても生返事をするだけ。そのことではさんざんからかわれたり、叱られたりしたものだ。そんな風にして夜の9時、10時と過ぎ、11時近くなるとさすがに親も怒り始める。でも私はちっとも気にせず、というより正確にはまわりのことには気づかず、目の前に繰り広げられるマンガの世界に没頭していた。

　そんなとき、おばあちゃんが優しい声で話しかける。
「夜更かししたらあかんよ」それから恐怖の物語を始めるのだ。「夜更かしするとな、早よ寝とけばよかったーっちゅうて悔やんでも悔やみ切れんような目に合うんやで」
「どんな」
　なぜかおばあちゃんが怖い話を始めると私は顔を上げて返事をしてしまうのだ。
「おばあちゃんが子どものころの話やけどな、このあたりにはそれは立派な宿があったんや」
「宿ってホテルみたいなもん？」
「ああそうや。ホテルみたいなもんやのうて、ほんまもんのホテルや。インペリアル・グランド・ホテルゆう名前やった」
「うそや。この辺にそんなもんがあるわけないやない」
「まあまあ、信じられへんのもわかるけどな、街はすっかり変わってしもたんや。ホテルの1つや2つ、なくなってしもても何も珍しいことあらへん」

　おばあちゃんは若い頃そのホテルで働いていたのだという。フロントには24時間、誰かしらがいなくてはならないので、月に6回ほどは深夜に起きていなくてはならなかったという。「夜更かししたくてしてたわけやない。ただ仕事やからしょうがなしに起きとったんやで」。

　そしておばあちゃんは目撃してしまったのだ。

　その時おばあちゃんはフロントのカウンターを整理していたそうだ。ちょうど奥の控え室に入る前に片付けていたのだった。ボールペンをボールペン置きにセットし、伝票類をきちんとそろえ、紙屑を始末し、後ろを向いて文具類を引き出しにしまい、振り向いたらそこに男が立っていたのである。「そらまあ息が止まるかと思たで。なんせ、気配も何もなかったからなあ。大きなスーツケースを持ってはるのに、転がす音も聞こえへんかったし、正面の回転扉も回ってへんし。どこから出てきたんか全然わからへんのや」

　男は部屋番号を告げ、おばあちゃんは言われるままに鍵を渡すと、男はスーツケースをごろごろ転がしながらエレベーターホールに向かう。ところがその後エレベーターが動く音が聞こえない。ずいぶんたってから恐る恐るエレベーターホールを見に行くと、もうそこには誰もいなくなっている。ぞぞーっと総毛立つような恐怖を覚えながら控え室の男性にその話をすると「グレーの格子縞のスーツの男か」と言う。その通りだというと、男の言った部屋番号まであててみせた。

　おばあちゃんがちょっと安心して、常連さんなんですか？と尋ねると、ちょっとした事故があってからその部屋は倉庫として使われていて、部屋番号はもう存在しないし、フロントには鍵もないはずだというのである。

「その人、なんやったん？」

「そうか、おばあちゃんは？」
　私が聞くとおばあちゃんは目を細め、さあ、と呟く。
「男の正体はわからんかったけど、その晩、空襲があってホテルはめちゃくちゃに壊れてしもたんや。天井の高かった1階はぺしゃんこになってな」おばあちゃんはふうとため息をついて言葉を続ける。「その時おばあちゃんも死んでしもたんや」

「さあ、いい加減にしなさい」
　父が私を叱る。私がおばあちゃんに目で合図をすると、おばあちゃんはわかったよ、というようにうなずいてすーっと部屋の隅に吸い込まれていく。

（「夜更かし」ordered by kyouko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

感謝の言葉と、お願い＆お誘い

　Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？　もしも気に入っていただけたならぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブクログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

　「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそこのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

　現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→公開中の作品一覧

　SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「Sudden Fiction Project Guide」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

　ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、Facebookページなどに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

　読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

　10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「急募！お題　この秋Sudden Fiction Project開催します」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！　はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

　こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひご一緒に盛り上がってまいりましょう。

怪談

http://p.booklog.jp/book/39043

著者：hirotakashina
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/39043

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/39043

公開中のSudden Fiction Project作品一覧
http://p.booklog.jp/users/hirotakashina

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.